

連載 (供覧) いはひまつりのみち

宗教は人を殺し、祭祀は人を生かす
世界平和のための祭祀を復興させる

第八回 祭祀による自立再生社会の姿

南出喜久治 (令和 6 年 12 月 15 日記す)

ちちははと とほつおやから すみめおや やほよろづへの くにからのみち
(父母と遠つ祖先から皇御祖八百万神への国幹の道)

【祭祀による自立再生社会の姿】

福島県郡山市の飯森山にある飯豊和氣神社（いひとよわけじんじや）には、五穀養蚕の守護の神延喜式内の古神である御饌津神（みけつかみ）が祭られています。御饌津神は、食物を司る神々の習合であり、全国の主な神社に摂社として祭られてゐる御祭神です。この飯豊和氣神社の由緒に、注目すべき箇所があります。

それは、「秋の祭典には、甘酒を醸し桶のまま神殿に供えて、参詣の人々に授け飲ませ、また御種貸神事として神前に供えた種糲を、信者へ貸し下げ翌年の祭典に新穀を返納させたが、何種の種が交じっていても雑穀とならず、主穀と同一となるという奇妙な稻靈の御種貸しと言う古代の神事があった。」とある部分です。

これと同様の行事として、神宮の神嘗祭に際し、今年収穫された稻穂（初穂）をお木曳車に載せて、豊受大神を御祭神とする外宮に奉納する外宮初穂曳の神事があります。

これらの御種貸神事や外宮初穂曳神事などが何を意味するかと言へば、大宜都比売神（おほげつひめのかみ）、保食神（うけもちのかみ）、豊受大神、それに稻荷神（稻成神）など食物を司る多くの神々は御食津神（みけつかみ、御饌津神）として習合し、全国の各神社に祭られ、種糲の奉納と下賜（頒賜）がこれまで絶え間なき綿々として繰り返されてきた歴史的事実があるといふことです。つまり、全国の神社は、種糲などの集積地であり、その分配の基地でもあつたといふことになります。それは、宮中、伊勢神宮、出雲大社で五穀豊穣を祝ひ、皇祖皇宗、天神地祇にその恩恵を謝して自らも食する、太陰太陽暦の 11 月の下の卯の日に行はれてきた新嘗祭の原型です。いまでは太陽暦によつて 11 月 23 日を勤労感謝の日とされて、その名残りを留めて居るだけですが、宮中祭祀としては今も続いてゐます。

この神事を雛形として全国の神社で大々的に再興隆させ、臣民家族が毎年収穫毎に奉納と下賜を続けるためには、日頃から農に親しみ、稻を含めた五穀や野菜などを臣民家族単位で育てて収穫することを実践する必要があります。そして、そのことの喜びと感謝のために収穫した作物の一部を御先祖様は勿論、近くの氏神さまや護国神社に奉納します。そして、次の耕作のために種糲や種苗が必要な臣民家族はこれらの下賜（頒賜）を受けます。このやうにして、自然の恵みを共同体が公平に受け、それぞれの生業（なりはひ）とすることができるのです。このやうなことを全国に広げて行き、全国の家族が奉納下賜運動を展開すれば、家族の食料自給率は毎年向上し、国家の食料自給率も向上するのです。

そして、自給自足、地産地消を可能とする単位共同社会（まほらまと）を作り、それを極小化することによって、堅固な自立再生社会ができることになります。これが自立再生論であり、詳しくは拙著『國體護持総論』を参照してください。